

## ホレホレ節にみるハワイ日本人移民の生活

篠田 左多江

Hole Hole Bushi: A Work Song Composed by the Japanese Immigrants  
on the Sugar Plantation in Hawaii

Satae SHINODA

### はじめに

2000年5月にホノルルで催されたNHK TV番組「のど自慢イン・ハワイ」でチャンピオンの座を勝ち取ったのは、日系四世アリソン・アラカワであった。彼女は、かつてハワイのサトウキビ・プランテーション<sup>1)</sup>で働いていた日本人移民の作業歌「ホレホレ節」を歌ったのである。この歌は、ハワイ製糖産業が衰退し、プランテーションもほとんど消滅してしまった現在<sup>2)</sup>では、すっかり忘れられていた<sup>3)</sup>。アラカワの歌は、かつて歌われていたものを日系二世の作曲家ハリー・ウラタ<sup>4)</sup>が採譜して再現したものである。プランテーションで、労働者たちは身近な事件や自分の感情をホレホレ節のメロディに乗せて歌った。テーマは、労働の辛さ、望郷、ゴシップ、農園管理者へのウサ晴らしなどであった。これらの歌詞を読み解くことによって、当時の日本人の生活が生き生きと浮かび上がってくる<sup>5)</sup>。

これまでホレホレ節は低俗なものとして研究対象にもならず、社会学や歴史学の本のなかにならずかに引用されるだけであった。1985年、かつて日本語放送のアナウンサーであったジャック・タサカ<sup>6)</sup>が、新聞の連載記事をまとめた『ホレホレ・ソング』<sup>7)</sup>を出版して、初めてこの歌の全貌が知られることとなった。本稿ではこの著作を参考にしつつ、歌詞を集めて分析し、日本人移民の生活がいかなるものであったかを明らかにしたい。

### I. サトウキビ・プランテーションの成立

ハワイ諸島ではじめてサトウキビに注目したのは、1778年に初めて到達し、これらの島々をサンドイッチ・アイランド (Sandwich Island) と命名して西欧世界に紹介したキャプテン・ジェームズ・クック (Captain James Cook) であった。彼はこの年の1月にカウアイ島のワイメア (Waimea) に上陸したが、このとき高台に生えるサトウキビに気づいたという。サトウキビはもともとハワイに自生しており、先住民の食料であった。先住民は砂糖という形ではなく、若い茎を折って甘い汁を吸ったり、甘味料として用いた。人びとの砂糖精製への努力はすでに1802年という早い時期にはじまっている。最初は中国人が本国から石臼や鍋を持参して

精製を試みたが失敗した<sup>8)</sup>。つぎに1819年、スペイン人が実験的に試み、1827年にはオアフ島のマノア・ヴァレー (Manoa Valley) でジョン・ウィルキンソン (John Wilkinson) というイギリス人がサトウキビ栽培を試みるなど、さまざまな試行錯誤があった。

初めてサトウキビ栽培に成功したのは、1835年カウアイ島コロア (Koloa) であった。ここには十分な降雨があり、野生のサトウキビが一面に生い茂っていた。アメリカ東部のボストンから来たウィリアム・フーパー (William Hooper)、メイン州ハロウエル出身のピーター・ブリンスメイド (Peter Brinsmade)、ウィリアム・ラッド (William Ladd) の3人が、カメハメハⅢ世から土地を借り受け、住み着いて苦労した揚げ句、コロア・プランテーションを作りあげたのである。コロアでの成功ののち、各地につぎつぎとプランテーションが誕生した<sup>9)</sup>。サトウキビの育成のために欠かせない温暖な気候、肥沃な土地、豊かな水という条件を備えたところは、ハワイには数多く存在したからである。

ロナルド・タカキによれば、プランテーションの成立を容易にしたのは、グレート・マヘレ (Great Mahele)、ゴールドラッシュ、南北戦争、合衆国との互惠条約であるという<sup>10)</sup>。1848年、グレート・マヘレと呼ばれる土地分割法が布かれ、伝統的土地所有制度が消滅した。さらに1850年には、外国人居住者も相続財産として土地を所有できるようになったため、先住民の私有地はあっという間に白人 (haole) の手に渡ってしまった。このころ合衆国西海岸では金鉱が発見されてゴールドラッシュに湧いていた。砂糖をはじめ農産物の需要が一気に高まり、ハワイが生産国として注目されるようになった。1860年代には南北戦争中の海上封鎖のためルイジアナの砂糖が届かなくなり、ハワイの果たす役割が大きくなっていった。1875年、米布互惠条約により、ハワイは関税なしで合衆国へ砂糖を輸出することができるようになったのである。これに勢いづいたハワイは砂糖ブームに湧き、1890年までには私有地総面積の4分の3がハオ



ハワイ島ピホヌア (Pihonua) プランテーション経営者の家 (廃屋)  
(2002年9月筆者撮影)

レ（白人）またはハオレの会社に所有されるようになった。そして1875年から1910年までにプランテーションの数は、20から52へと飛躍的に増えていった。外国投資家の資金を大いに活用したため、砂糖は世紀の転換期には、ハワイの特産物の座をゆるぎないものにしたのである。

このような多くのプランテーションには当然、多くの労働力が必要であった。かなりの暑い気候で過酷な労働に耐える人びとを連れて来ることがぜひ必要であった。ハワイでは合衆国に先駆けて1852年の憲法に奴隷制度禁止条項が盛り込まれていたため、奴隷を使うことはできなかった。最初に先住民を労働者としてすることが計画されたが、同じ種類の作物を商品として大量に生産することの意味が理解されず、失敗に終わった。

中国人は先にも述べたように1802年に製糖器具をもって来たという記録があるので、19世紀のはじめの白檀貿易の最盛期にはすでに来ていたことが分かる。プランテーションで労働者が不足したときには、広東、福建などから出稼ぎ労働者が来たが、少し金を貯めるとすぐに帰国するか、町へ出て小規模な商店などを営む者が多く、安定した労働力とはならなかった。

1868年には日本人移民の第1号が到着。これより10年後にはポルトガルから多数の移民がやって来た。ポルトガルではワイン産業が不況で経済危機にあり、失業者も多かったため、新天地を求めてハワイへ来た。家族連れで来るということは社会的にも安定した状態になり、歓迎された。1878年から87年までに12,000人、1906年から13年までに13,000人が入国した。彼らはのちに述べるようにプランテーション労働者の監督として働き、弁護士や医師などの専門職を目指す者はあまりいなかった。そのほかプランテーション労働者として移住した人びとは、ペルトリコ人、ドイツ人、フィリピン人などであった。

## II. 日本人移民の到着

明治元年（1868年）、日本から最初の移民153名が、イギリス帆船サイオト号でハワイへ到着した。彼らは日本政府が正式に認めた移民ではなかった。鎖国が解かれて間もない日本で、ハワイはどこか正確に理解できる者はいなかったため、彼らは斡旋人から「天竺」行きの出稼ぎと聞かされて集められたのであった。彼らはハワイ政府とプランターの協議により、オアフ、マウイ、カウアイ島のサトウキビ・プランテーションに送られたが、あまりにも過酷な労働に耐えられず、のちに43名が帰国してしまった。残った者は「元年者」と呼ばれ、さまざまな分野でハワイ社会に貢献した。

日本政府はこの失敗に懲りて移民送出には消極的になった。1881年、第7代ハワイ国王カラカウア（Kalakaua）は日本を訪問し、明治天皇に会って日本から移民を送るようにと要請した。これを受けて日本は慎重に準備した結果、1884年から「官約移民」の募集を開始し、翌85年、第1回官約移民944名がハワイへ渡った。翌年には日布渡航条約が締結され<sup>1)</sup>、この条約のもとで1894年までに26回にわたって移民が送られ、総数は約27,600名に達した。官約移民の終了とともに渡航条約も廃止された。

1894年にハワイ共和国が樹立されてからは、政府ではなく民間の移民会社の斡旋による渡航

となった。これから1899年までを「私約移民」時代と呼ぶ。1900年になると合衆国契約移民条令廃止により契約労働は禁止となった。これにより移民が契約に縛られることのない「自由移民」時代が到来した。

1908年、日米紳士協定が締結されると、再渡航と呼び寄せ以外の移民は不可能になり、「呼び寄せ移民」時代と呼ばれる。新しい移民の渡航が難しくなったため、人びとはこれまでの出稼ぎではなく、定住を決意するようになり、写真結婚によって花嫁が呼び寄せられた。1907年から23年までに写真花嫁は14,000名に達していた<sup>12)</sup>。花嫁が来て家庭が営まれ、二世も誕生して日系コミュニティは活況を呈するようになった。一方でプランテーションの労働条件の改善や賃上げをかかげたストライキが頻発した。1909年には第1次オアフ島サトウキビ耕地の大ストライキ、20年には第2次オアフ島耕地同盟のストライキと、日本人移民も封建的な考えを脱して労働者としての自覚をもち、資本家と堂々と闘うようになった。しかし24年の排日移民法によって、日本人移民は完全に禁止されてしまう。

移民を多く送出したのは、広島県、山口県、沖縄県、熊本県、福島県であった。1903年に山口県大島郡大島町からの移民・河本正助<sup>13)</sup>は、17才でハワイ渡航を決意した。動機はなんといっても賃金の高さであった。当時日本では、役場の役人の月給が5～6円、小学校長が10円程度であったのに、ハワイのプランテーションで働けば1ヶ月12ドル、日本円で24円の給料であった。これはたいへんな高給で、1年に50円位は貯蓄するつもりで出かけたという。河本は、英語を勉強しなければいつまでも下級労働者にとどまると考え、合衆国本土へ渡り、南カリフォルニア大学を卒業してシカゴで働いた後に帰国するという道をたどったため、ハワイ移民のなかでは異色の存在である。河本の観察によると、日本人出稼ぎ労働者は爪に火をともしような儉約ぶりで、3年から5年で500円を貯めて帰国する者がおり、帰郷して家や田畑を買ったという。しかし、白人からバカにされても極端に節約してお金をためてうまく田畑を買えた人は100人にひとりくらいではないかとも言う。ホレホレ節は労働者の歌で、官約移民時代にはじまり、もっとも盛んに歌われたのは呼び寄せ移民時代までであった。

### Ⅲ. プランテーションの生活

日本人移民は合衆国本土の西海岸3州にも多数存在して、農園労働に従事したが、彼らのなかから民謡は生まれなかった。ホレホレ節は官約移民がはじまったころから歌われ、長い間歌い継がれたきわめて特殊な歌と言えるであろう。ホレホレとは前にも述べたように、ハワイ語のhole holeで、サトウキビの枯れた葉をむしる作業を指す。プランテーションでの労働は炎天下、10時間も単調な作業が続く重労働であった。労働者たちは歌を歌うことで単調な作業をリズムカルに変えて、辛さを紛らわすことができた。現在採譜・再現された歌はたいへん洗練されたメロディになっているが、当時は節回しもプランテーションによって少しずつ異なっていたようである。歌はおおむね即興だが、人びとの共感を呼ぶ内容であれば歌い継がれた。

その後日本人がプランテーションを出て都市部に住むようになると、宴席で余興として歌わ

れるようになり、華やかなお囃子のはいったいわゆる「お座敷ホレホレ節」も生まれた。そしてプランテーション・スタイルとティーハウス・スタイルという2系統の歌として定着していった。

ジャック・タサカは、ホレホレ節のルーツとして広島県の初すり歌をはじめとして8つの民謡を選んで検討した結果、瀬戸内海地方の樽歌ではないかと結論づけている。

一方、かつて日本語新聞の記者として活躍した川添善市（樫風）<sup>14)</sup> は、広島県の「呉節」をルーツとする説を示している<sup>15)</sup>。川添は1901年に出版された『太平楽』<sup>16)</sup> のなかに「呉節」を見出し、その歌詞がホレホレ節とまったく同じであることを発見した。呉節のほか、ミル唄、ホウハナ唄もあり、引用を見るとのちに述べるホレホレ節と同一の歌詞である。『太平楽』が所蔵されているハワイ島日本人移民資料館は目下閉鎖されているため、筆者はこれを確かめることができなかったが<sup>17)</sup>、川添の記述が正しければ、ホレホレ節のルーツは広島県の呉節としてもよいのではないかと思われる。

移民の多くは広島県、山口県出身であったので、歌詞にはこの地方の方言が多く見られる。日本語が中心だが、それにハワイ語、英語が混じり、移民たちのコミュニケーション手段であったピジン (Pidgin) という間に合わせ言語も使われている。1人が歌うとその場にいる人たちが、歌の終わりに「アー ヨイシャレ ヨイシャレ」、「パッサコ パッサコ」などのかけ声をかけ、作業をリズムカルに進めたと思われる。それは決まったものではなく、そのときの雰囲気や臨機応変につけられたらしい。

現在残っているホレホレ節の歌詞はさまざまなハワイ史の本のなかに引用されているが、どれもほぼ同じである。タサカによれば最盛期には100もの歌があったが、現在では約40しか残っていないという。これらを集めて、日本人移民の生活を構成してみることにする。

## A. プランテーションで歌われたホレホレ節の分析

### 【ハワイへ到着】

わたしゃ苦勞を 千人小屋よ 主に逢うのも 今七日<sup>18)</sup>

日本人移民がホノルル港に到着すると、彼らはまず検疫のためにカカアコ地区にある移民収容所に収容された。ここは1,000人も収容することができる施設であるところから、移民たちは「千人小屋」と呼んでいた。伝染病などにかかっている場合には本国送還もあったが、問題がなければ1週間もすれば出ることができた。

### 【プランテーションへ】

製糖産業の労働者は、畑の仕事とミルと呼ばれる精糖工場の仕事のいずれかに割り当てられた。畑仕事はサトウキビの栽培と収穫で、つぎにサトウキビは工場へ運ばれて加工され、粗糖として合衆国本土へ送られた。ここで精製されたのはハワイで消費される分だけであった。

【製糖工場で】

智恵をしぼって 工夫をこらし 煎じつめたる ミル機械<sup>19)</sup>

工場での仕事を歌ったホレホレ節はほとんど見あたらず、これが唯一残っている歌詞といえるかもしれない。収穫したサトウキビの茎を絞って糖蜜を採り、煮詰めて粗糖をつくる作業を歌っている。これは前出の呉節にミル唄として引用されている。

【畑仕事】

サトウキビ栽培の仕事はおおむねつぎのようなものであった。まずプラプラ (pula pula) はハワイ語で、種に使うサトウキビを切ること、それを苗として植え付けることをこれもハワイ語で カナコー (kana ko) と言った。植えてからの手入れは、まずハナワイ (hana wai) で、ハワイ語で水やりを意味する。ホーハナは英語の hoe (鋤) とハワイ語の hana (労働) が組み合わせられた語で、雑草取り。収穫のときにはカチケン、英語の cut cane がなまったことばで、すなわちキビを切ること。最後に切ったキビを荷車に乗せることをハッピーコウと言った。これはハワイ語の hapai (担ぐ) と ko (サトウキビ) である。移民たちは日常にこのようなピジン英語を使っていた。

可愛い砂糖ッ子 預かる心 撫でて育てて 2年越し<sup>20)</sup>

根には培い 草取りのけて すぐなキビをば 育てたい<sup>21)</sup>

サトウキビは植え付けてから収穫までに2年を要する。肥料や水をやり、草取りをして品質のよいサトウキビを育てるのにはたいへんな苦勞がともなった。しかし移民たちはよい作物を



オアフ島カフク (Kafuku) 製糖工場の廃墟

(2000年9月筆者撮影)

作ろうと希望に燃えて就労した。

### 【つらい現実】

ハワイハワイと 夢見てきたが 流す涙は キビのなか<sup>22)</sup>

ハワイハワイと 来て見りゃ地獄 ボーンが閻魔で ルナは鬼<sup>23)</sup>

ハワイに行けば大金を手にすることができて、あっという間に錦衣婦郷ができるという夢をもってやってきた人びとにとってプランテーションでの労働は想像よりもはるかに厳しいものであった。労働者の1日は、朝4時半にはじまる。朝食を食べ、弁当を作り、身支度をして番号札を首にかけ、5時45分に工場に集合、ルナ（監督）に従ってプランテーション内を走る列車に乗って畑へ向かう。仕事は6時にはじまる。11時半から30分が食事のための休憩で、持参した弁当を食べる。12時から仕事を再開、午後4時半にパウ・ハナ（pau hana 仕事終了）となり、再び列車で帰宅する。立ったままの1日10時間労働、しかもキビの葉にはトゲがあり、どんなに防備しても手にささる。キビは成長すると2メートル以上の高さになり、畝と畝の間は風通しが悪いため、たいへんな暑さであった。ノロノロしていると馬に乗ってやってくる監督の怒号がとんだ。ボーンは英語でボス (boss) のこと、ルナは労働者40人にひとりの割合についており、ポルトガル人またはドイツ人が多かった。のちには日本人のルナもいた。地獄のようなプランテーションには、閻魔も鬼もいて移民たちは涙を流しつつ耐えて働いたのである。

雨は降り出す 洗濯物は濡れる 背なの子は泣く まんまこげる<sup>24)</sup>

雨が降り出し、洗濯物がぬれてしまう。背中におぶった子は泣き出すし、炊いていたごはんがこげてしまうという女性のおかれた立場をよく表した歌で、聞く者が切なくなる。女たちは帰宅すると、食材にするために住宅の周囲の狭い空き地を利用して野菜などを栽培したり、炊事、洗濯、風呂焚きなどの雑用が待ちかまえていた。とくに育児、家事のすべては女性の肩にかかっていたので、たいへんな重労働であった。この歌は、家事に追われる女たちの心からの叫びである。

### 【監督への恨みつらみ】

地震 雷 怖くはないが ルナの声聞きゃ ぞっとする<sup>25)</sup>

雨がしょぼ降る カンカン出鐘 追い立てルナの 靴が鳴る<sup>26)</sup>

移民たちは馬に乗って威張って畑を巡回し、働けと追い立てるルナにおびえつつ働いた。製糖会社のトップはたいていアメリカ人かイギリス人であったが、実際に畑に来るのは1ヶ月に1度程度であった。ルナはそうした支配人やプランターに忠実で、能率を上げるべく、労働者たちを酷使したのである。

高い熱でて 畑で寝たら ルナに見られて 叩かれた<sup>27)</sup>

労働者が病気になったときはプランテーションの医師のところへ行き、証明書を書いてもらわなければ仕事を休むことができなかった。しかし医師は会社側に立ち、よほどの重病でないと証明書は出なかったから、労働者は病をおして働きに行かなければならなかったという。

ゴーへ・ゴーへとせき立てられて ルナを殴った 夢を見た<sup>28)</sup>

ルナの目玉に ふたしておいて ゆっくり朝寝がしてみたい<sup>29)</sup>

労働者たちはつらい現実のなかでもユーモアを失わず、このような歌を歌うことでウサ晴らしをしたのであろう。ゴーへは英語の Go ahead (進め) である。

ルナの下には「ヒッパリメン」と呼ばれた労働者がいた。ルナは作業をはかどらせるためにとくに指名した労働者に余分の賃金を支払って、グループの先頭に立たせ、速いペースで進んで他の労働者を引っ張って行く役割を与えた。ヒッパリは日本語、メンは英語の men である。移民たちは同じ労働者でありながら、ルナの側について、仲間につらい思いをさせるヒッパリメンを恨んだ。ホレホレ節ではつぎのようなやりとりが見られる。

追ってきなされ 文句はやめて 口でホレホレするじゃなし (ヒッパリメン)

追っていきりよか お前のあとに わしにゃ増し金 あるじゃなし (一般労働者)<sup>30)</sup>

ヒッパリメンが、ぶつぶつ言わずについてこいと言え、労働者の方は時給に上乘せ金があるわけでもないのに、そんなに速く働けるかと抵抗している。

十センもらって 引っ張るやつは 犬に食われて 死ねばよい<sup>31)</sup>

この歌によるとヒッパリメンの時給は一般より10セント高かったと思われる。十センはセントを日本の銭に当てはめて、1セント、2セントというべきところを1銭、2銭と言い習わしていた。

辛いホレホレ こらえてするよ 国にゃ女房や 子までいる<sup>32)</sup>

これは、日本に妻子をおいて出稼ぎに来た労働者の歌である。早くたくさん金を貯めて日本へ帰ろうと辛い労働に耐えている。このような人を移民たちは「辛抱人」と呼んだ。今では辛抱するなどということばは死語にひとしいが、このころは辛抱人とは褒めことばであった。多くの日本人が極端に生活費を切りつめて貯蓄に励んだ。しかし3年の契約期間が終わったとき、大金を手にして故郷へ帰れた人は少なかった。

#### 【仕事をさばる】

醤油飲んだが 待つ間にさめて 果てはコロコロ カラボーシ<sup>33)</sup>



醤油を飲むと発熱するため、さぼりたいときは醤油を飲むことが労働者の間で流行したという。ところがタイミングが合わず、医師の診断を待つ間に熱が下がってしまい、裁判になって留置場へ送られたという歌である。コロコロはハワイ語で kolo kolo (裁判)、カラボースは英語の俗語で calaboose (留置場) である。

雨が降りゃ寝るよ 日和なら休む 空が曇れば 酒を飲む<sup>34)</sup>

現実にこのようなことをする人がいたわけではなく、このように暮らせたらいいのという願望を歌った歌であると思われる。

明日はコロコロ 三日はきまり 赤い毛布で カラボース<sup>35)</sup>

前出の歌と類似したもので懲罰が歌われている。プランテーションの仕事をさぼったり、仮病を使ったりすると、プランテーションの警官に捕まり、裁判にかけられる。そして3日間留置場に入れられる。その間は日本からもってきた赤い毛布をかけて留置場で寝ることになる。しかし畑仕事よりもこの方が ずっと楽でよかったかもしれない。

### 【楽しみ】

今日のホレホレ 辛くはないよ 昨日届いた 里だより<sup>36)</sup>

懐かしい故郷からの手紙が届いた翌日は元気が出て、仕事もはかどる。移民たちは手紙を乗せた船が着くのを楽しみに待った。ハワイ島では「キナウ号」(The Kinau) という船が手紙や食料を運んできた。プランテーションから見渡すはるか海のかなたにこの船が見えると、日本人は皆、手を休めてしばし見入ったという。

今日はサンデじゃ ワヒネを連れて アイカネ訪問と 出かけよか<sup>37)</sup>

プランテーションでの楽しみは日曜日であった。これは日曜日に妻と友人宅を訪問しようという楽しい一コマを歌ったものである。サンデは英語で Sunday、ワヒネ (wahine) はハワイ語で女性=妻、アイカネ (aikane) はハワイ語で友人という意味である。英語、ハワイ語の混合したピジンが使われて、プランテーションでのコミュニケーションの状況をうかがうことができる。

無事にカチケン すましてうれし 苦労のかいある キビのでき  
汗を流して つくった報い 今日カチケン おめでたや<sup>38)</sup>  
カチケンすまして 勝ち鬨あげて 償金とって 帰朝かな<sup>39)</sup>

カチケンには前にも述べたように cut cane で、収穫するとき葉を燃やし、残った茎を切る。たいへん労力を要する仕事であったが、終わると給料を受け取り、万歳を唱えたという。これ

は初期のころの契約労働ではなく、「請けキビ」という小作制度の場合であろう。この場合はかなり自主的に働くことができたが、収穫高を増やさねばならないことは同じであった。しかも砂糖の相場はつねに変動する上、不作の年もあるので、短期間で日本へ帰るわけにはいかなかった。立志伝中の人物になれたのはごくわずかである。

### 【契約期間の終了】

行こかメリケン 帰ろか日本（またはジャパン）ここが思案の ハワイ国<sup>40)</sup>

これはホレホレ節のなかでもっともよく知られた歌。官約移民は3年の契約期間が終わると、日本へ帰るべきか、合衆国本土へ渡ってさらに稼ぐかのいずれかを選択しなければならなかった。

条約切れるし 頼母子落ちた 国の便りにゃ はよ帰れ<sup>41)</sup>

条約とは労働契約を指す。契約が終わって頼母子も落ちてまとまったお金が手にはいったところで、故郷からは早く帰ってこいという手紙が来たという歌で、出稼ぎ労働者の心情が歌われている。頼母子とは相互扶助のために金銭を融通し合うことで、何人かが集まり、毎月少しの掛け金を出し合ってお金を貯め、必要な人が借りていくという民間の金融制度である。担保がない移民たちは銀行からお金を借りることができず、お互いに助け合うためにさかんに頼母子を利用したようである。

条約切れたら キナウに乗って 行こかマウイの スペクルへ<sup>42)</sup>

上に引用した歌は、幸せな人の歌で、多数の人は契約労働が終わっても日本へ持ち帰る目標の金額など持ち合わせなかった。そこでさらに働き続けることになり、できるかぎり良い条件のプランテーションを探した。マウイ島のspreckelsville製糖会社 (Spreckelsville Sugar Company) は、日本人労働者を差別せず、給料もよいと評判の高いところであったから、日本人の憧れであつたらしい。キナウは島を巡る定期船の名前で、契約期間が終わったらキナウ号によってマウイ島へ行こうとの希望をもっていた人が多かったようである。

心からとて わが土地離れ 今はマウイで 苦勞する<sup>43)</sup>

ようやく製糖会社を移って、憧れのマウイのspreckelsvilleへ行つたが、そこは期待していたような所ではなかったようである。これを裏づけるかのようにspreckelsvilleではこのように歌われていた。マウイでも労働の厳しさは同じであったのだろう。

嫌なホレホレ カライをやめて やめて行きましょ ホノルルへ<sup>44)</sup>

ハワイに残って働く決心をしたとき、選択肢はもうひとつあった。プランテーションに残る

のではなく、都会へ出るという選択である。カライ (kalai) はカチケンと同じ意味のハワイ語である。畑での辛い仕事をやめてホノルルへ行こうという歌である。プランテーションで小金を貯めた人はこぞってホノルルへ行き、小さな店をはじめたり、商店で働いたりした。次第にホノルルには日本人の集中するコミュニティが形成されていった。

条約切れても 帰れぬやつは 末はハワイの ポイの肥<sup>45)</sup>

前出の歌のように幸運に恵まれて帰国できた人はよかったが、そうでない人びとは自暴自棄になって自らを嘲笑してこのように歌った。ポイ (poi) というのは、ハワイ先住民の昔からの常食であるタロ芋をすりつぶした、ちょうど日本のトロロのような食べものである。現在でも食料品店では必ず売っているが、この時代はタロ芋の水田はたいへん多くみられたはずである。

### 【孤独】

ハナワイすまして キャンプに戻りゃ にくやマウカに 夫婦星<sup>46)</sup>

ハナワイ (hana wai) は水やり、マウカ (mauka) は山を表すハワイ語。水やりを終わって家路につくと、山に夫婦星が輝いているという歌で、忙しく働いたあとのほっとしたとき、ふっと孤独を感じるという歌。独身男子の一瞬の心の動きが表されている。女性が少ないプランテーションでは結婚適齢期でも相手がなくて、故郷に写真を送り、花嫁を紹介してもらって呼び寄せる写真結婚の習慣に頼らざるをえなかった。

### 【写真結婚】

頼母子落として ワヒネを呼んで 人ととられて ベそかいた<sup>47)</sup>

これは1910年代に流行った歌であるという。せっかく辛抱して貯めたお金を郷里へ送り、写真結婚で妻を呼び寄せたが、結婚がうまくいかず、妻は他人のところへ行ってしまったというなんとも気の毒な歌である。これが流行したということは、このような体験をした人が多かったので、共感をよんだからであろうか。

### 【退廃・自暴自棄】

希望をもって出稼ぎに来たハワイで、多くの人は当初の夢をうち砕かれた。簡単にお金が稼げる方法などなかったのである。それにもめげずに努力して「辛抱人」の生活を貫き、初志貫徹して帰国した人はよいが、夢も希望も失い、プランテーションを出て町をあてもなくさまよい、墮落していく者もあった。

三十五センで ハナハナよりも パケさんとモイモイすりゃ アカヒマヒ<sup>48)</sup>  
 三十五センでホレホレしょより パケさんとモイモイすりゃ アカヒカラ<sup>49)</sup>

最初の歌はジャック・タサカによれば1900年ころに歌われたという。パケ (pake) は中国人を表すハワイ語、モイモイ (moimoi) はハワイ語で寝るという意味。つまりプランテーション労働はたった35セントにしかならないが、中国人と寝れば75セント(akahimahi ハワイ語)になるということで、いったんこのような道にはいってしまうと、安易に楽をしてお金を稼げるために抜け出すことが難しく、ますます泥沼にはまっていった女性がいたという。2番目の歌は少し時代がさがり、アカヒカラ (akahikala) は1ドルを表す。出稼ぎ労働者は単身でやってきた男子が多かった。とくに中国人は1890年にすでに移民禁止になっていたために、結婚難であった。各地には魔女屋まじやと呼ばれる売春宿があり、出稼ぎ労働者の相手をする不幸な女性たちがいたことも事実である。これもたいへん有名な歌でハワイに関する多くの本に引用されている。

日の出倶楽部は 鬼より怖い ワヒネ取られて 金までも<sup>50)</sup>

ホノルルのダウンタウンのパウアヒ (Pauahi) にはバクチ場があり、日の出倶楽部はそのなかの最大手のヤクザ集団であった。彼らはプランテーションから遊びに来る労働者たちを待ちかまえてバクチをやらせ、金を巻き上げるだけでなく、負けると多額の借金をさせて、払えないとその人の妻を渡せと脅した。当初の目的を果たせず、自暴自棄になってバクチにのめりこむ者は跡をたたず、ヤクザをはびこらせることにもなった。

明日はサンデじゃ 遊びにおいで カネはハナワイ わしゃ家に<sup>51)</sup>

日曜日に夫は水やりに出かけて留守なので、家には自分ひとりしかいないから遊びに来いと男を誘っている歌である。人妻のなかには、このように夫以外の複数の男を相手にして、騒動を起こすこともあったらしい。

宅で朝から 首尾してお待ち きっとバンバイ 行くわいな<sup>52)</sup>

これは男から人妻への歌で、バンバイは英語の by and by であるが、日常会話でも頻繁に使われたことばである。上の歌とは逆に男が女の家へ行くから待っていてほしいと言っている。これらの道徳的退廃は、写真結婚の矛盾に起因することが多かった。写真結婚では他人の写真を送ったり、借り物の服に自動車写真を撮り、金持ちであるように装ったりして、女性をだますことも平気でまかり通っていたようである。したがってハワイへ来たものの間かされていたのとは違う現実に嫌気がさして、夫から離れようとする妻もいた。しかし大多数の花嫁は、思い描いていた夫とまったく異なる人が波止場に現れても、英語は通じない上、経済的自立もできないという状況では、嫌でも夫についていくしかなかった。独身男子の多いプランテーション

ンの暮らしのなかでは誘惑も多く、男女間のスキャンダルが絶えなかった。人びとは噂話をホレホレ節にのせて歌った。

どうせこうなりゃ 騒動のもとよ 騒動起さにゃ 添わりゃせぬ  
騒動起こして 添われる身なら 早く騒動 起こしたい<sup>53)</sup>

カネがフウフウすりゃ 出てこいワヒネ 連れていきます ホノルルへ<sup>54)</sup>  
ルナがフウフウしようと 二人はままよ 晴れて添います ホノルルで<sup>55)</sup>

浮気をしたからと大騒動になっても好きな者同士が結婚したいという歌と、誰がなんと言おうとプランテーションを出てホノルルへ行き、結婚するという決意を表した歌である。それぞれ2つの歌は類似している。歌われているうちに表現が少しずつ変化したと思われる。フウフウ (huhu) はハワイ語で怒るという意味である。夫がつべこべ言うなら家出してきなさい、私がホノルルへ連れていこうという歌が、監督が怒ろうとプランテーションを出てホノルルで結婚しようという歌に変わっている。

### 【永住】

故国を出るときゃ 行李がひとつ 今じゃ女房に 子まである<sup>56)</sup>  
横浜出るときゃ 涙で出たが 今じゃ子もある 孫もある<sup>57)</sup>  
故国を出るときゃ ひとりで来たが 今じゃ子もある 孫もある<sup>58)</sup>

はじめは出稼ぎのつもりでハワイへ来た日本人も、花嫁を迎え、苦勞をともにしながら頑張っつてついに永住を決意する。少しずつ違うことばが使われているが、このタイプの歌は多い。永住してハワイに根を下ろし、日系人の二世、三世が育っていく。

### B. お座敷ホレホレ節

ホノルルのダウンタウンには日本人コミュニティが形成されて、1890年代の終わりころからは商店や料亭なども開店した。しかし1900年のホノルル市内におけるベスト発生に伴う汚染家屋焼き払い事件で、日本人町、中国人町が類焼し、日本人コミュニティは消滅してしまった。その後、ヌアヌ通り (Nuuanu Street) を中心に30以上の料亭が開業し、芸者も50人ほどいて賑わったという。もっとも賑わったのは1910年から禁酒法が施行される1918年までであった。ここで歌われた歌のひとつがお座敷ホレホレ節である。これは従来の作業歌ではなく、三味線とお囃子に派手な囃子ことばを入れ、芸者がお座敷で披露するようにアレンジされたものである。毎晩、お座敷で芸者たちはこれを歌い、踊ったという。ちなみにハワイには日本のような置屋制度はなく、芸者というのは独立した芸能人という職業と認められていたため、二世女性で芸者を志望する者がいた。ハリー・ウラタの採譜になるものはつぎのようである。

花嫁御寮で 呼び寄せられて 指折り数えて 五十年  
そのわきゃチャッチャでヌイヌイ カマアイナ

カネはカチケン わしゃホレホレよ 夫婦揃って 共稼ぎ  
そのわきゃチャッチャで ヌイヌイ ハナハナ<sup>59)</sup>

囃子ことばにはハワイ語が使われている。そのわきゃは日本語で「その訳」、チャッチャも日本語で「ないしょ」、ヌイヌイ (nuinui) はハワイ語で「大いに」、カマアイナ (kamaaina) はハワイ生まれの人という意味である。写真結婚で花嫁として呼び寄せられたが、50年たった今では本物のハワイ人になったという意味である。プランテーションでサトウキビの茎を切るのには体力が必要なので男の仕事、ホレホレは枯れ葉を取り除く軽作業で女の仕事とされていた。夫婦がそれぞれプランテーションで働く様子を歌っている。

1941年12月7日（ハワイ時間）に起こった日本軍による真珠湾攻撃によって、ホノルルの料亭の全盛時代も終わりを告げた。戦後も製糖産業は続いたが、機械化され、ホレホレ節を歌いながら作業する時代は終わって、歌も忘れ去られていった。

### C. 新作ホレホレ節

1960年、官約移民75周年の記念行事のひとつとして、ハワイの日本語新聞『日布時事』はホレホレ節の歌詞を募集した。つぎにその作品をいくつか引用する。

泣きの涙で ホレホレしたが 今じゃ気楽な 帰化市民<sup>60)</sup>

1952年、これまで市民権を得られなかった日系一世も市民となることができるようになった。ハワイは長いこと準州であったが、1959年に合衆国の50番目の州に昇格した。プランテーションで泣きながらホレホレ作業をした一世も晴れて合衆国市民として暮らすことができる喜びを歌っている。ホノルルには「帰化市民の会」という組織があるが、ここに集う人びとも年々その数が減り、数百人いた会員も現在ではわずか70名になった。

条約時代の 苦労が実り 今じゃペンション 楽隠居<sup>61)</sup>

ペンション (pention) は年金を指す。契約労働者としてハワイに来て、若いときに苦労したお陰で、老年になって年金を受給し楽に暮らしているという幸せな気持ちにがにじみでている。

今のハワイは 極楽浄土 むかしや移民の 生き地獄<sup>62)</sup>

以上は、若いときにプランテーションの労働を経験した人の作品であろう。昔、苦労したからこそ極楽のような幸せな生活ができるというこのことばには重みがある。このときの応募作品は、ハワイへ来て良かった、幸せになれたという内容ばかりであった。

1968年は元年者と呼ばれた日本人移民がハワイへ到着してちょうど100年目にあたる。各地

で盛大な日本人移民100年祭が行われた。その記念行事のひとつとして短歌・俳句集が出版され、ホレホレ節の新作募集もあった。応募者は少なかったようで、6つの歌が記念句集 *Dove* に掲載されている。いずれも戦後移住者、合衆国軍人と結婚してハワイへ渡った女性の作品である。彼女たちも異国へ嫁ぎ、たいへんな苦労を経験したであろうが、その苦労はプランテーションでのそれとは比べものにならないであろう。作品のなかにこめられた気持がまったくちがって、かなりきれいな事に終わっているのは苦労の質がちがうからであろう。

いとしお前と 所帯をもちて やがてハワイの 土となる  
涙かわかぬ 夕ぐれどきに 真珠の湾に かけし橋<sup>63)</sup>

### おわりに

ハワイの製糖産業は戦後も続いたが、日本人移民一世も合衆国市民となり、多くの人が農業を離れて都市部へ移動した。二世たちは第2次世界大戦で日系部隊として従軍し、ヨーロッパ戦線で勇敢に戦った結果、除隊後はGIビルで奨学金を得て高等教育を受け、専門職についたり、政治家や実業家として成功をおさめる者も出はじめた。プランテーションの日本人も監督をつとめるようになった。しかし世界的な砂糖消費量の減少と製糖労働者の賃金が世界の同業者のなかで最高となったことで、安い労働力をもつ国との競争に敗れ、かつての砂糖王国ハワイは衰退し、今では観光王国になった。

若者たちは伝統的なハワイアン音楽やロック・ミュージックには魅力を感じるが、のんびりしたホレホレ節の田舎臭いメロディなどには関心を示さなくなった。しかしハリー・ウラタの努力で再現されたこの歌は、1999年にワシントンDCの Smithsonian 博物館のアジア・コレクションに加えられた。

"Let us preserve Hole Hole Bushi as a legacy of our Issei Pioneers and sing wholeheartedly, so that this song will never be lost. It will remain forever as an important part of our tradition and passed from one generation to the next."<sup>64)</sup>

「パイオニアであった一世の遺産として保存し、心をこめて歌いましょう。そうすればこの歌が消えることはありません。大切な伝統として永久に残り、世代から世代へと受け継がれていくのです」とウラタは言う。最近ではアリソン・アラカワの成功に影響を受けたためか、いろいろな歌手がホレホレ節のCDを出している。なかには歌謡曲のなかにこの歌を挿入したものである。復活したホレホレ節を伝えて行くのは、一世パイオニアへの敬意につながるであろう。

### 註

- 1) 当時、日本人はプランテーションを耕地と呼んでいた。
- 2) 現在もなおマウイ島でサトウキビが栽培されているが、小規模である。製糖工場もマウイ

- 島のみで1カ所だけ操業しているが、閉鎖も時間の問題であるらしい。
- 3) ジャック・タサカは『ホレホレ・ソング』(p.139)のなかで、「ホレホレ節は今ではだれひとりとして歌う者もない"幻の民謡"といっても過言でない」と述べている。
  - 4) Harry Urata. 1918年ホノルル生まれ。『布哇報知新聞』で翻訳を担当。日系ラジオ局のプログラムマネジャー。古賀正雄などの日本の作曲家に師事し、1930年代からハワイで音楽活動を続ける。
  - 5) 映画 "Picture Bride" は Kayo Hatta の作品 (1994)。プランテーションでの日本人の生活をかなり忠実に再現している。ハリー・ウラタが音楽を担当、ホレホレ節も歌われている。
  - 6) 1914年ホノルル生まれ。広島高等師範付属小・中学校を経て大阪商科大学予科に学び、1937年ハワイへ帰る。1949年～76年まで日本語ラジオ局アナウンサー。
  - 7) 日本地域社会研究所発行。
  - 8) Wong Tze-Chun が白檀の貿易船で、砂糖の精製装置をラナイ島にもたらした。現在その石臼と鍋はピショップ博物館に保存されている。
  - 9) Potter & Kasdon & Hazama. *Hawaii, Our Island State*. Honolulu, The Bess Press, 1979. p.145.
  - 10) Ronald Takaki. *Pau hana*. Honolulu, Univ. of Hawaii Press, 1985.
  - 11) この条約はさかのぼって第1回官約移民にも適用された。
  - 12) Michi Kodama-Nishimoto et al. *Hana Hana*. Honolulu, Univ. of Hawaii, 1984.
  - 13) 土井弥太郎. 山口県大島郡ハワイ移民史, 徳山市, マツノ書店, 1980. pp.120-121.
  - 14) 川添善市 (樫風) (1903-1970) ハワイ島ババアロア・プランテーション生まれ。幼いとき両親の出身地広島県に行き教育を受け、1923年ハワイへ帰る。さまざまな日本語新聞の記者として活躍。ハワイに残る古い日系文化関係書籍を蒐集・紹介した。
  - 15) 川添善市. 移民百年の年輪. 移民百年の年輪刊行会, ホノルル, 1968. pp.214-216.
  - 16) 鹿鳴山人. 太平楽. ヒロ, 町田商店, 1901.
  - 17) 筆者は2001年9月12日にヒロのハワイ島日本人移民資料館で調査する予定であったが、テロ事件のため空港が閉鎖となり、行くことができなかった。同年12月資料館の大久保清館長が亡くなられたため、資料館は閉鎖となり、直接『太平楽』を見て、川添の記事を確認することはできなかった。
  - 18) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.36.
  - 19) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.43.
  - 20) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.39.
  - 21) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.42.
  - 22) Harry Urata. Hole Hole Bushi. Privately recorded CD, Honolulu, 2000.
  - 23) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.45.
  - 24) Harry Urata. Hole Hole Bushi. Privately recorded CD, Honolulu, 2000.
  - 25) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.46.
  - 26) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.48.
  - 27) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.74.
  - 28) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.46.
  - 29) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.49.
  - 30) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.44.
  - 31) 川添善市. 移民百年の年輪. 移民百年の年輪刊行会. ホノルル, 1968. p.250.
  - 32) 川添善市. 移民百年の年輪. 移民百年の年輪刊行会. ホノルル, 1968. p.251.
  - 33) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.75.
  - 34) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.383.
  - 35) 川添善市. 移民百年の年輪. 移民百年の年輪刊行会, ホノルル, 1968. p.251.



- 36) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.52.
- 37) Harry Urata. Hole Hole Bushi. Privately recorded CD, Honolulu, 2000.
- 38) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.160.
- 39) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.161.
- 40) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.381.
- 41) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.381.
- 42) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.173.
- 43) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.174.
- 44) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.170.
- 45) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.176.
- 46) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.178.
- 47) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.382.
- 48) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.141.
- 49) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.382.
- 50) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.104.
- 51) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.383.
- 52) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.97.
- 53) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.382.
- 54) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.99.
- 55) 大久保清編. ハワイ島日本人移民史. ハワイ島日本人協会, 1971. p.382.
- 56) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.186.
- 57) Harry Urata. Hole Hole Bushi. Privately recorded CD, Honolulu, 2000.
- 58) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.186.
- 59) Harry Urata. Hole Hole Bushi. Privately recorded CD, Honolulu, 2000.
- 60) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.192.
- 61) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.192.
- 62) ジャック・タサカ. ホレホレ・ソング. 東京, 日本地域社会研究所, 1985. p.192.
- 63) 官約移民百年記念ハワイ詩歌集刊行委員会編. Dove. 私家版, 1986. pp.227-228.
- 64) Harry Urata. Hole Hole Bushi. Privately recorded CD, Honolulu, 2000.

## Summary

Hawaii was once called "Sugar Kingdom." The first successful sugar plantation was founded by three New Englanders at Koloa, Kauai in 1835. Soon after it began operating, sugar production gradually increased. Gold rush in California and the Civil War caused a sugar boom in Hawaii and the plantation became "Big Business." New sources of labor were needed to solve the labor shortage.

A lot of immigrants from China, Japan, Portugal, Germany and the South Sea Islands came to Hawaii. The Japanese came as contract laborers for the first time in 1868. Though they dreamed of earning much money and quickly becoming rich, they realized Hawaii was not a paradise but a place like a hell. They complained unfamiliar food, poor living conditions, treatment by the lunas. To comfort themselves and better the monotonous field work, they composed "Hole Hole Bushi." "Hole hole" is a Hawaiian word which

means to strip the leaves off the sugar cane stalks by hand and "bushi" is a Japanese word for a song.

Hole Hole Bushi is a kind of a work song in which they used so-called pidgin, a mixture of Japanese, Hawaiian and English words. The verses of the song vividly tell about their daily lives on plantation: their dreams, disappointment, hard work, homesickness, gossip, hatred for the lunas and so on. The Japanese laborers sang this song loudly in the cane fields to give cheer to themselves.

Hawaii, Hawaii the best  
I even dreamed of Hawaii  
But what a disappointment  
I wept in the sugar cane field.

Around 1910s there were more than 100 versions, but they gradually disappeared and now only 40 remains. The song was passed orally from person to person in two styles: the plantation style and the tea house style.

Harry Urata, a nisei musician restored the song and as the result of his effort it was added to the Asian Collection at the Smithsonian Institute in Washington D.C.